

「幼児を尊重すること」を考える

関口はつ江

新学年が始まる四月、世情は閉塞感が強いこの頃であるけれども、幼児達の世界はいつも開かれて明るいものであつて欲しいと心から願わずにはいられない。保育者はその幼児の世界を守り育てるべく心を込めて幼児にかかわり、それを支えるべく保育の研究が進められている。しかし、実践も研究も常に発展の途上にあることを忘れずに反省的でありたいと思う。

特に現代の合理主義的な考え方の風潮のもとで、ともすると幼児本来の生活を置いてきぼりにして大人の思考が先走っていないか、慎重に考えなければならないのではないだろうか。大人の視点で状況を分析して幼児の行動を技巧的に誘導したり、統合的な状態を細分化して整理し、決着を急いで、そのことで幼児の側の主体的な育ちを損なっていないかに

ついで考えておきたい。

最近、保育実習生のレポートに「先生も大変だね。そんなに褒めなくてもいいんだよ」と園児に言われたときの衝撃が述べられたり、ある母親が「僕の組は厳しいんだよ。お絵かきの時にお話してはいけないんだよ」と我が子が言ったときの「厳しい」というニュアンスに驚いたと語ることなどに会った。今の幼児の一面を窺うことが出来る。

褒められて「嬉しい」と喜び、注意されて「いけない」と素直に思うのではなく、相手の意図を斟酌したり、相対化しているとすれば、環境に対して心を全開して受け入れようとする幼児の心性とは相容れない。今の幼児は鋭い、と片づけてしまってもよいだろうか。保育の場においてすら人に対して構えさせてしまっているとしたら、素朴で柔らかな幼児期の心によけいな負担をかけている保育の現状があると思わざるを得ない。

こうしたことは、保育者が幼児のその時々^々の気持や状態を大切にして、そこを保育の起点とすることをしないで、保育者の意図を先に立てておいて、間接的にそれを表し、それとなく（幼児が自ら動いたように）幼児の行動を促すことが、幼児の主体性を尊重する保育方法であると考えやすいことと無関係ではないように思われる。

例えば次のような場合について考えてみる。ある子が何かを作ろうとして空き箱をいくつも持っている。分けて欲



しい子に譲ろうとしない時、保育者が「一ついくらですか」とごっこ形を作る。「○○円」と答えたところから箱は無理なく分けられ、さらにごっこ遊びに発展したとする。しかし、その保育者のかかわりはその子が始めにイメージした遊びをやり遂げることに、自分から決断して他に譲るという主体的行動にも繋がってはいかないだろう。

また、帰り支度をしないで遊んでいる子に「誰の落とし物？」と言い取りに来させたとする。身支度を間接的に促してはいるが、本人が自分から身支度することに気持を向けると言うよりその物を早く始末させることになっている。仲間関係についても次のようなことがよくある。ある子がその子と遊びたい相手を拒否してしまう。保育者は誰でも遊べるようにしてやりたいとおもいから間に入り、遊びたくない理由を聞き出して「もうそうしないと言うから遊んであげよう」と説得する。二人が一緒に遊ぶと言う結果はでもその子自身が相手と遊ぼうと思った場合と意味がちがっている。保育者に聞かれて答えたことは気持の一部かもしれないし、「もうしないと言うから遊べる」は大人の理屈である。

しかし、こうした場合一般的に幼児はそれを受け入れざるをえない。幼児が保育者の提案を進んで受け入れているように見えても「保育者と幼児」という力関係から幼児は最終的には保育者を拒否できないからである。やさしく言われればなおのことである。

近年、見守る、待つ保育の問題点が指摘され、保育者の役割が見直されている。しか

し、幼児の何を育てるのか、主体的行動を促すとは如何なることを問わずに、幼児が「否」と言えない状況が作られることが多くなると、幼児の行動は保育者の意に叶っても心は離れているであろう。幼児と保育者の思いのやりとりがないからである。

保育のねらいの一つは幼児が自分でよりよく行動する力を育てることである。先の例で言えば、幼児が自分の思いを実現して何かを作ったり、自分から他の子に物が譲れたり、身支度をしたり、また、友達と仲良くしようとする気持をもつことである。その場でのその子の問題に向かい合って「分けてあげてね」「お支度しよう」「仲良くね」のように保育者の気持ちを直接表現することはやり方によっては押しつけになるが、幼児はそのことを考えなければならぬし、決めなければならぬ。即座には保育者の意に添わなくても、そのことの意味が伝わっていれば、やがて自分からできるようになるであろう。

現代の幼児を取り巻く環境や発達の課題の質や量を考えると、幼児の真の主体性を育てることが如何に難しいか言うまでもない。根本的な問題に立ち戻りながら、幼児がありのままの自分を表現し、幼児らしい力を十分に発揮し、且つよりよい行動を自ら選ぶことが出来るようにするにはどうしたらよいのか、幼児を尊重するとはどうすることなのかについて、現実には則して考えて行きたいと思う。

(鶴見大学短期大学部)

